

教 育 研 究 業 績 書

平成 29 年 11 月 15 日

氏 名 加 藤 剛

研 究 分 野	研 究 内 容 の キー ワード	
教育学	英語教授法、言語学、応用言語学	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
・ 語彙学習のための Word List の活用	平成 19 年 4 月～ 現在に至る	ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科の教養教育科目「イングリッシュ・スキルズⅠ」（1年次、半期、必修2単位）、「イングリッシュ・スキルズⅡ」（1年次、半期、必修2単位）、及びヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」（1年次、半期、必修1単位）、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」（2年次、半期、必修1単位）、において実践している。動物看護を学習する大学生として必要な語彙習得の学習効果を高めるために、学習目標とする語彙を以下の3種類に分類し、学習目標を明確にして、段階を踏んで学習させている。 1. General Service List（頻出語） 2. Academic Word List（学術語） 3. Technical Word List（専門語） まずは、1年次で、どのような英文にも対応するための頻出語を学習する。次に、2年次で、大学で読む様々な分野の学术论文に頻出の学術語を学習し、その上で、動物看護に特化した専門語を学習する。毎回の授業で学習範囲を明示し、習得の活動及び試験を行うことで、学習目標の明確化による学習効果の向上と、語彙学習に対する意欲の向上が見られる。また、リーディングを行う際、学習目標とする語が、学生・教員共に明確になるという利点もある。
・ 語彙学習における視覚教材の活用	平成 19 年 4 月～ 現在に至る	ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科の教養教育科目「イングリッシュ・スキルズⅠ」（1年次、半期、必修2単位）、「イングリッシュ・スキルズⅡ」（1年次、半期、必修2単位）、及びヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」（1年次、半期、必修1単位）、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」（2年次、半期、必修1単位）、において実践している。教場のパソコンとプロジェクタースクリーンを利用して、「フラッシュカード」を実施。手順は以下の通りである。 1. 学習目標とする語彙の予習（Word List を利用） 2. スクリーンに次々と英単語を映し、学生各自

<p>・ 文法学習における Consciousness-raising activity の導入</p>	<p>平成 19 年～ 平成 22 年 3 月</p>	<p>に素早くその意味をイメージさせる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. 2 秒後に日本語訳を言い、意味の確認をする。 4. 反復練習 5. ペーパーテスト <p>この活動によって、語の習得効果の向上（テスト結果の向上）、反応速度の向上（ペーパーテストの時間短縮と長文読解速度の向上）、及び学習意欲の向上（ゲーム感覚という楽しみ）が見られる。</p> <p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科の教養教育科目「イングリッシュ・スキルズⅠ」（1 年次、半期、必修 2 単位）、「イングリッシュ・スキルズⅡ」（1 年次、半期、必修 2 単位）、において実践している。大学生は、高校で一通り文法学習を済ませているため、高校までと同じような教授法だと、意欲の低下を招くことが多い。そこで、学習意欲を高めるため、また、より正確で深い文法知識習得のため、Consciousness-raising（学習者の言語形式への意識化）の活動を取り入れた。以下はその手順である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 配列を工夫した英文を学生に与える。同じ文法規則を並べる場合もあれば、違う文法規則を対比させる場合もある。例えば、過去形と現在完了形の違いを理解させるために、2 つの英文を並べて提示する。 2. 学生自身に文法規則を自ら発見させる。上記の過去形と現在完了形との違いの例であれば、形と意味の違いに気付かせる。 3. 学生自身が発見した法則を、教員が明確にまとめる。 4. その法則を用いた英文に多数触れさせて、定着を図る。 <p>Consciousness-raising の活動を導入することによって、学生の授業への取り組みの改善が見られた。また、すでに理解していること、何度教わっても理解できないものを教員から直接教わることよりも、自らが法則を発見することの方が、学習への動機付けとしても、理解の深度という点でも効果的だということが、学期末の学生への意識調査の結果から明らかであった。</p>
<p>・ 協同学習の原理を取り入れた 授業設計</p>	<p>平成 22 年 4 月～ 現在に至る</p>	<p>ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」（1 年次、半期、必修 1 単位）、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」（2 年次、半期、必修 1 単位）、において実践している。グループを作り、座席の並びも工夫し、周囲と協力して問題解決を図る。代表的な技法「ジグソー」の手順について、以下説明する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 最初に「ホームチーム」と呼ばれる通常 4 人のグループを形成する（ランダムにメンバーを決める場合もあれば、能力を考慮してメンバーを選ぶ場合もある）。

<p>・ 4 技能統合型学習の導入</p>	<p>平成 22 年 4 月～ 現在に至る</p>	<ol style="list-style-type: none"> 2. 各メンバーがそれぞれ異なった英文を受け取る。例えば、メンバー1 は犬の性格についての英文を受け取り、メンバー2 は犬の体の構造についての英文、メンバー3 は犬の餌についての英文、メンバー4 は犬の飼い方についての英文を受け取る。 3. 各メンバーがホームチームを離れ、同じ情報を持った別のホームチームのメンバーと共に、「専門家チーム」を作る。専門家チームは自分たちに与えられた英文の内容を、協力して理解しようと努める。 4. 各メンバーは自分のホームチームに戻り、交互に自分の担当部分を教え合い、質問をしたり、討論をしたりする。 5. メンバーがそれぞれ個人として全ての英文についての小テストを実施する。 6. ホームチームで討論する。 7. 各ホームチームでプレゼンテーションをする。 <p>協同学習の原理を取り入れることによって、大きく分けて 2 つの効果が得られる。1 つ目は、英文理解の向上である。これは、互恵的な支え合いによって、個人では気付かなかったことにも気付くようになったためだと考えられる。質問をしたり、質問に答えたりすることで、より深い理解に到達することが、小テストの結果から見てとれる。2 つ目は、学習意欲の向上である。自分が果たすべき役割を与えられているので、責任感を持って取り組むようになる。それでいて、同じパートを担当する協力者がいるので、個人の負担が大きくなりすぎず、また、話し合い・助け合いの中で雰囲気や和むことによって、効果的な学習環境が作りあげられる。学期末の学生への意識調査の結果からも、とりわけ意欲の向上は顕著である。</p> <p>ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」(1 年次、半期、必修 1 単位)、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」(2 年次、半期、必修 1 単位)、において実践している。リーディング中心の授業だが、より学習効果が高いとされる 4 技能統合型の学習を取り入れた。手順は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 英文のリーディング 2. 英文のリスニング 3. 学生同士のディスカッション 4. 発表原稿のライティング (レポートとして提出) 5. プレゼンテーションによるスピーキング (聞き手はリスニング) <p>平成 22 年から平成 28 年までに行った学生の意識調査では、4 技能統合型授業に高い満足度を示し、また、半数以上の学生が、英語に対する自信が高まったと回答している。また、同じ英文を何度も読み、聞き、書き、話すことによって、内</p>
-----------------------	-------------------------------	---

<p>・授業内での速読の導入</p>	<p>平成 22 年 4 月～ 現在に至る</p>	<p>容理解も深められることが、レポートを通して確認できた。</p> <p>ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」(1年次、半期、必修1単位)、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」(2年次、半期、必修1単位)、において実践している。速く読むことができれば、読む量を増やせるし、読むことが苦でなくなるし、また、内容の理解、とりわけ全体像の把握がしやすくなる。これらの目的に到達するために、授業内では主に以下の2つに取り組んでいる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業内で扱った英文のシャドーイング。 2. 簡易な英文を用いた速読速解。 <p>速読が効果を上げる条件として、学習者にとって難しすぎないということが重要とされる。よって、授業内で解説をした、語彙も文法も内容も理解できる英文を、シャドーイングという手段で何度も音読し、さらなる理解と読むスピードの向上を図っている。また、簡易な400語の英文を読ませ、時間を計り、内容に関する問いを10問解き、スピードと正確さを記録して行く。これを半期続けたところ、平成22年4月から平成28年3月までの間で、学生約400人を調査した結果、1分間に読める語数が平均約15語増え、正答数は平均約2個増えた。劇的な変化とまでには行かないが、速読の訓練によって、スピードと正確さの両立は可能だということが示唆される。</p>
<p>・長文読解及び語彙学習のための Extensive reading の導入</p>	<p>平成 22 年 4 月～ 現在に至る</p>	<p>ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」(1年次、半期、必修1単位)、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」(2年次、半期、必修1単位)、において実践している。授業で学習した語彙・文法・読解のスキル・速読のスキルを磨くために、授業外での多読 = Extensive reading に取り組んでいる。手順は以下の通りである</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Graded Readers シリーズの購入或いは貸し出しをする。 「簡単」で「楽しめる」ものにする。例えば、Oxford の Level 1 なら、General Service List の最初の300語程度の単語レベルとする。 2. 1週間に1冊のペースで読み進める。 Oxford の Graded Readers の Level 1 なら、1冊50ページ程度とする。 3. 次回の授業時に、簡単な読後レポートを提出させる。 読むことの楽しさを阻害しないように、内容に関する簡単な質問と、レベルが学生に合っているかの確認を中心に行う。 4. 教員によるフィードバック。 リーディングや語彙学習の効果を上げるためには、ある程度の量の「意味のわかる」インプットが必要であると言われている。しかし、大学の授

		業内だけでは、十分な練習量を確保できないので、授業外での取り組みを促し、明示的学習のみならず、学習対象言語に暗示的に触れる機会を作る必要がある。 Extensive reading を通して、意味がわかる量的インプットを繰り返した結果、学習した語彙の定着、内容理解の向上、学習意欲の向上という好ましい影響が、レポートから確認できた。
<p>2 作成した教科書、教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 講義用補助教材 (プリント教材) General Service List (GSL) テスト Academic Word List (AWL) テスト 	平成 19 年 4 月～ 現在に至る	<p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科の教養教育科目「イングリッシュ・スキルズⅠ」(1年次、半期、必修2単位)、「イングリッシュ・スキルズⅡ」(1年次、半期、必修2単位)、及びヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」(1年次、半期、必修1単位)、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」(2年次、半期、必修1単位)、において使用している。語彙学習の効果向上のために、General Service ListとAcademic Word Listテストをそれぞれ2種類作成し、必要に応じて使用している。その2種類は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 和訳に適する英単語を選択するテスト (1回で60個分。6個ずつ10のグループに分け、6個のうちの3個を、適する和訳に合わせて選択する形式。P. NationのVocabulary size testと同型式で作成。数字を選択するだけという、学生・教員への負担が少ないものでありながら、指定した範囲の単語を網羅できるという利点がある。) 2. 英文の空所に、和訳に合う英単語を書かせるテスト (文脈の中で正しく語を用いること、及び正しい綴りと発音の関係を確認することができるという利点がある。) <p>1年次の授業では、主にGSL1のテストを、範囲を指定して毎週実施し、一般的な重要語の抜けをなくすようにする。また、自宅での復習用として、GSL2のテストを配布する。2年次前期では、主にAWL1のテストを、範囲を指定して毎週実施し、学術的な英文にも対応できるようにする。また、自宅での復習用として、AWL1を配布し、そして、1年次の復習として、GSL2のテストを授業内で実施している。語彙学習は外国語学習の基礎を成すため、まずは学習する単語の種類・目的を明確にし、授業内での明示的な学習、家庭での違う角度からの復習を合わせることで、語彙の定着に効果が出ることは、テストの結果から確認できる。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義用補助教材 (プリント教材) Technical word list (動物看護に関する専門用語) 	平成 22 年 4 月～ 現在に至る	<p>ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅱ」(1年次、半期、必修2単位)、「英語Ⅳ」(2年次、半期、必修1単位)、において使用している。平成27年までは1年次の後期に、平成28年からは2年次の後期に授業</p>

<p>・講義用補助教材 (プリント教材) アクティビティを伴うリーディング教材</p>	<p>平成 19 年 4 月～ 現在に至る</p>	<p>内で使用。2 年次ないしは 3 年次から始まるより専門的な動物看護の学習に対する準備をするのが目的である。動物名、人間とは異なる体の名称、疾病の名称など約 200 語を、項目別にリストにした。これにより、より専門的な英語の学習に取り組みやすくなり、また、学生の学習意欲の向上にもつながっている。</p> <p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科の教養教育科目「イングリッシュ・スキルズⅠ」(1 年次、半期、必修 2 単位)、「イングリッシュ・スキルズⅡ」(1 年次、半期、必修 2 単位)、及びヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」(1 年次、半期、必修 1 単位)、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」(2 年次、半期、必修 1 単位)、において使用している。動物看護を専攻とする学生のニーズに応えるため、ネットなどで無料公開されている(BBC など)動物に関する英文を利用し、教材を作成した。そのまま使用すれだけでは難度が高い英文が多いので、学習目標とする語彙、文法を明確にし、また、内容理解を助けるために、学生が協同して行うアクティビティを付加した。これによって、学生は、ディスカッションをしながら、段階を踏んで理解に達することが可能になった。また、生きた現場での英語を体感することは、学生の学習意欲を大いにかきたてるものであった。</p>
<p>・講義用補助教材 (プリント教材) 速読のためのリーディング教材</p>	<p>平成 22 年 4 月～ 現在に至る</p>	<p>ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」(1 年次、半期、必修 1 単位)、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」(2 年次、半期、必修 1 単位)、において使用している。速読をするためには、読み方の工夫が必要である。主な注意点は以下の 3 つである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 語順通りに解釈する(返り読みをしない)。 2. かたまりで解釈する(逐語訳をしない)。 3. 意味をイメージする(日本語を介さない)。 <p>このような読み方を実践するために、速読用のプリントを作成した。もともになる英文(主に授業で使用したもの)に、かたまりごとのスラッシュを入れて、そのすぐ下に読み下し訳を付したプリントを配布した。これを利用することで、学生は、速読の方法の具体的な例に触れ、自宅でもその例を確認しながら復習することが可能になった。</p>
<p>・講義用補助教材 (プリント教材) 多読のためのリーディングレポート</p>	<p>平成 22 年 4 月～ 現在に至る</p>	<p>ヤマザキ学園動物看護学部大学動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」(1 年次、半期、必修 1 単位)、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」(2 年次、半期、必修 1 単位)、において使用している。Extensive reading の学習効果を上げるのが目的。主な内容は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 読んだ本のタイトルとページ数 2. 内容に関する簡単な質問 3. 習得できたと感じる英語表現、及び理解できなかった英語表現

		<p>4. 満足度と理解度を5段階で自己評価</p> <p>自宅での多読用レポートを提出させることによって、学生の積極的な取り組みを促し、また、教員が進捗状況と到達度を確認することが可能になった。さらに、このレポートをクラス全体にフィードバックすることで、学生が興味を持てる英語の本を発見できたり、重要な英語表現の復習ができたりするなど、学習効果の向上に寄与している。</p>
<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価</p> <p>学生による授業評価アンケート調査</p>	平成 29 年 7 月	<p>ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科の教養教育科目「英語Ⅰ」(1年次、半期、必修1単位)、「英語Ⅲ」(2年次、半期、必修1単位)、における大学実施の授業評価アンケートで、17の評価項目のほとんどで、全体平均を上回っており、学生の満足度が高い結果となっている。</p>
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項</p> <p>なし</p>		
<p>5 その他</p> <p>なし</p>		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
<p>1 資格、免許</p> <p>修士(文学)</p> <p>修士(TESOL)</p>	<p>平成 16 年 3 月</p> <p>平成 25 年 10 月</p>	<p>早稲田大学大学院 文学研究科 英文学専修</p> <p>Temple University Japan The Master of Science in Education, Concentration in TESOL</p> <p>テンプル大学日本 英語教授法修士課程</p>
<p>2 特許等</p> <p>なし</p>		
<p>3 実務の経験を有する者についての特記事項</p> <p>なし</p>		
<p>4 その他</p> <p>なし</p>		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) なし (学術論文) 1 ジョージ・オーウェル (修士論文)	単 著	平成16年3月	早稲田大学大学院	<p>オーウェルが長年格闘した問題とは、作家が政治に関与しながらも、如何にして知的誠実を保つかということであった。1930～40年代という「政治の時代」にあつて、左翼知識人の如く政治主義に淫することも、芸術至上主義者の如く傍観的態度に留まることも潔しとはしなかったのである。政治に関りを持つ限り、誰であれ完全に偏向を免れることは不可能だが、かかる偏向が己が心中にも確実に存在することを認め、これと闘うことが「道徳的努力」であり、作家の務めだとオーウェルは固く信じていた。かかる信念を持つオーウェルが、「政治的目的と芸術的目的とを融合し、1つの作品にすることを最初に試みた」結果が、『動物農場』なのである。この作品は、ロシア革命が当初の理想を裏切りスターリン独裁となったソ連社会の現実を諷刺しているのだが、単にソ連一国の諷刺にとどまるものではなく、人間性の普遍的本質をも追究した作品となっているのである。</p>
(その他) 1 Fluent reading for academic purposes (大学における研究のための速読)	単 著	平成21年8月	Temple university Japan, English Education 8616 (学会発表)	<p>In academic settings, reading is assumed to be the central means for learning new information and gaining access to alternative explanations and interpretations (Grabe & Stoller, 2001, p. 187). Though oral communicative aspects have been much more emphasized recently, even today reading is the primary means for independent learning, whether the goal is performing better on academic tasks, learning more about subject matter, or improving language abilities. However, as Kitato & Miyamoto (1995) argued, Japanese college students' English reading ability is generally insufficient, even though they have spent much time on reading in English learning. Of course reading involves quite complex process and needs many kinds of skills, so the</p>

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
2 Problems, teaching and learning in L2 listening (第二言語リスニングにおける問題、指導、学習)	単 著	平成22年12月	Temple university Japan, English Education 8645 (学会発表)	<p>problems of Japanese students may be various, but Kitao (1994) points out that their inability to read English resulted mainly from their slow reading speed. Nation (2009) also emphasizes the importance of fluency development as one of the strands of a language course. In this presentation, I will discuss first benefits of reading fluency, then research on reading speed, factors affecting reading speed, conditions needed for effective fluency development, and finally activities to increase reading speed.</p> <p>This presentation investigates what kinds of problems learners have in L2 listening according to recent researches and what these mean for teaching and learning L2 listening. Indeed whether explicit listening strategy teaching based on researches can be successful or not remains as a matter to be discussed further, but I believe it deserves careful attention. Lynch & Mendelsohn (2002) point out that listening instructions conducted in classrooms often descend into just giving tests, which is not called instruction actually. I will give an example of typical listening instruction conducted in high school classroom in Japan. A teacher plays the CD of the National Center Test (the standardized preliminary examination for university applicants), has the students answer some fill-in-the-blank questions and just checks their answers. Certainly this is not called instruction, but just practice. From such instruction students cannot know what they should do while listening and how to improve their listening ability. In order to avoid this, teaching strategies is considered to be helpful and a number of studies have been conducted over the past few decades. Field (2000) argued that L2 listening teachers should determine what a learner can do and cannot do (the different sub-skills that s/he can perform, and those s/he can't), and then use this information to devise tasks that will help the students to be able to acquire those sub-skills. In this presentation, I will take up what Field suggested</p>

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
3 The nature and the implement of cooperative learning (協同学習の本質と履行)	単 著	平成25年8月	Temple university Japan, English Education 8656 (学会発表)	<p>above in a little more detail especially in Japanese classroom settings.</p> <p>The purpose of this presentation is to make you understand what cooperative learning is and to encourage you to implement it in cooperation with all of us. First I will shortly describe my teaching context, which will be helpful to understand what I am talking about in this presentation. In the next part, which is the main part of this presentation, I will talk about the characteristics of cooperative learning, the benefits of cooperative learning, and the differences between cooperative learning and traditional language learning. I believe that cooperative learning offers the key to solve a lot of problems in English education in Japan. Cooperative Learning refers to a systematic instructional method in which students work together in small groups to accomplish shared learning goals. As the data in a large amount of research shows, cooperation has positive effects on a wider range of outcomes, compared with competitive and individualistic efforts (Johnson & Johnson, 1991; Slavin, 1995; Kagan, 1999). Students operating in a cooperative learning activity attain higher achievement level than those who function under competitive and individualistic learning structures. Other findings in cooperative learning research show cooperation has positive effects on relations among students, enhancing motivation, deepening understanding of learning materials, or increasing social integration, and so on. It has been tested as one of the most effective and constructive teaching strategies. What is more, there are a lot of practical resources or materials that we can make use of for implementing cooperative learning in our classrooms, or there are also a lot of teachers and researchers who are trying to make teaching and learning more effective by cooperative learning. Cooperative learning offers good connection with them all over the world.</p>